
双月と猫

とわ 1 2 ?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双月と猫

【Nコード】

N2880Q

【作者名】

とわ12？

【あらすじ】

東方の世界で住んでいた猫又の小鳥遊（たかなし）つばめは、ある日突然

ゼロの使い魔の世界に召喚されてしまう。

東方の能力を持つ猫又が、繰り広げるお気楽ファンタジー小説です。

第一話

物語は、東方の世界から・・・（前書き）

※この作品を読むにあたっての注意

????作者に文才を期待しないで下さい

????文才が無いので、会話文が多くなっています。

????本編とは若干ズレが生じるかもしれません。

残酷描写は、一応です。

もし、それでも良いという方や暇過ぎて死んでしまうような方にみにオススメです。

斜め読みでもして、数分の暇つぶしにでもなれば良いと思っています。

更新は、作者が受験生という事もあるので、2週間に1回の更新を目指します。

第一話

物語は、東方の世界から・・・

? ? ? ? ? sideつばめ

「すいませ〜ん」

「・・・・・・あれ？誰も居ないのかな？」

「すいませ〜ん！！誰か居ませんか〜！？」

「は〜い、今行きま〜す」

やっとなたか・・・

「はいはい、何でしょうか小鳥遊さん？」

「これ借りたいんだけど・・・」

そう言つて3冊の本を出した。

「またゼロの使い魔ですか？というか、前に借りていった本を返して下さい」

「ええ〜コアちゃんそこを何とか・・・」

「ダメです。前もそう言つて借りていったじゃないですか」

(く・・・覚えてたのか・・・)

「お願いします、この通りです。どうかこの3冊を借していただけませんか？」

俺は、そう言つて土下座をした。

「はあ、仕方ないですね・・・今回だけですよ。次回はちゃんと持つて来て下さいよ。」

「ありがとうございます、このご恩は一生忘れません。」

「いや、そんな大げさな・・・まあ、白黒の魔法使いさんよりはましですよ。」

白黒？ああ魔理沙の事か・・・また盗んでいったのか。

「それじゃあ、借りて行きます。」

「やっぱり、ゼロの使い魔は面白いな。」

今俺は、借りた本を読みながら歩いている。

「……………」

何でもか聞こえたような……気のせいかな。

「……………」

なに！？ここで才人が……

「つばめさん！！」

うわぁ！？だ、誰？

「……………」なんだ、射命丸か。何でこんなところに居るんだ？

「それはこっちのセリフですよ。何で妖怪の山に入ってきて来てるんですか？」

え？妖怪の山？……………」何で俺、こんなところに？

「もしかして、また読みながら歩いていたんですか？」

「まあ……………」

「はぁ、これで何回目だと思ってるんですか？」

えっと、あの時が3回目で……

「10回目くらいかな？」

「何言ってるんですか！25回目ですよ。いい加減にしてくださいよ……………」

「そんなにか？まあいいや、じゃあまた……………」

そう言って再び歩き始めた。

「ちよ、ちよっと……………」そっちは、鬼の居る方ですよ……………」って、

聞いてないし……………」

何！？ここでルイズが……

「おい、あんた。いい度胸してるじゃないか？」

「あれ？何で萃香がここに？」

「……………」まあいい、アタイを楽しませてくれよ！」

……………」side射命丸

ああ、行ってしまった・・・あの馬鹿（つばめ）
・・・仕方ない、追うか・・・

いた！・・・何で萃香と戦ってるの？というか、一方的にやられてるし・・・

あ、倒れた。助けてあげるか・・・

「おゝい萃香ゝ」

「何だ？射命丸？」

「そいつの回収をしに来たんだよ」

うわぁ・・・ズタボロだなぁゝ

「なんだ、そういう事か。ほら、結構骨がイッてると思うから、永遠亭に連れてった方がいいかもしれないよ。」

「そうするよ。じゃあまた・・・」

?? ? ? ? ? ? sideつばめゝ

うう、体中が痛い・・・萃香は、相変わらず強すぎるって・・・
というかここは・・・永遠亭か？

「あ、やっと起きたか・・・」

「・・・ウドンか？」

「違うって何回言ったら分かるの？鈴仙・優曇華院・イナバよ、分かった？」

はぁゝ面倒くさ・・・

「何だっけ？レーセン・ウドン・イナゴだっけ？」

「はぁ、もういいわ。今度は何をしでかしたのかしら？退院したのは3日前よ、どうやったらそんな短期間に大怪我出来るのかしら？」
「どうやったら、って言われても・・・」

「本を読みながら歩いてたら、知らない間に妖怪の山に入ってたんだよ。」

「あんたは本当に馬鹿でしょ・・・そんな事言って、これで8回だよ。その理由で入院したのは・・・」

ううゝそれはほつというてほしいよ・・・

「で、怪我の状態はどうなの？」

「骨折よ。左手と胸の骨が折れてるわ・・・」

「そうか・・・」

「まあいいわ。それより、お腹空いてるでしょ？今持ってくるわ」
そう言って、レーセンは行ってしまった。

「・・・てゐ、何やってんの？」

「ねえ、つばめ？右手か左手、どっちがいい？」

・・・何？いきなり？意味がわからないんですけど。

「じゃあ・・・左手で。」

「ok♪口開けて♪」

何だろう？この前は、睡眠薬を飲まされたし・・・

「えっと、何で？？睡眠薬はやめてよ、あと虫も無しで。」

「だいじょうぶだから、はやく口開けてよ！」

「はい・・・」

??ゴクッ

「うわっ！苦っ・・・ねえ、てゐ？今のは何？」

「えっと・・・よくわからない薬。師匠の机の上に置いてあったやつ。」

「ちよっとそのビン見せて？」

「いいよ、はい」

飲むな危険！！

効果・・・不明

副作用・・・不明

材料・・・何か色々な物

開発中なので、絶対に飲まないように。

?? ? ? ? ? ? ? ? ?
? ? ? ? ? ? 永琳

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

てる・・・・・・・・なんて事してくれたんだよ、100%やバイやつじゃん。

「おい！てる！！お前なんて事して・・・くれ・・・て・・・んだ・

・よ・・・・・・・・」

？ーバタリ、と俺はその場に倒れてしまった。・・・そして意識を手放した。

第一話

物語は、東方の世界から・・・（後書き）

作者は、本当に文才が無くて読みにくいかもしれませんが、暖かい目で見守って下さい。

感想・アドバイスなど、何でもお待ちしております。

猫、目覚める!! (前書き)

どうも?です。

2週間に一回とか言いながら、また書き込みました。

新呪文「リアル・エスケープ」(現実逃避)を発動!!

なんてね・・・まあ、そんなことですけど、どうぞ暇でも潰して行
って下さい。

猫、目覚める!!

うう・・・・・・頭がクラクラする・・・

「あっ!! つばめさん、やっと起きましたか。全く、大変だったんですからね」

あ、ウドンか・・・またてゐかと思った・・・

「食事を取りに行つて帰ってきたら、倒れててビックリしたんですよ。一体何があったんですか？」

えっと・・・たしかてゐに変な薬を飲まされて・・・気を失ったんだっけ。

「・・・てゐに変な薬を飲まされた・・・」

「てゐに?? 分かったわ、師匠に言つてキツく叱ってもらふことにするわ。」

んゝさつきからずっと頭がクラクラと・・・

「ちよつとつばめ、あんた本当に大丈夫なの？」

「いや、ちよつと頭が・・・」

「悪いの? それともおかしいの?」

「・・・・・・なにその究極の選択は? どっちもだめじゃん。」

「・・・両方だけど」

「そう、なら大丈夫ね?」

ええゝ何でそうなるの? まあいいけど、

「それよりさあ、何か食べ物ない? お腹ペコペコなんだけど・・・」

「何か食べ物って言われても・・・ちよつと待ってて何か探してくるから。」

それにしても遅いなあゝどうしたんだろう?

「お待たせ! はい、これ」

そう言つて差し出されたのは、

白菜	鶏肉	豆腐	ネギ
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
1玉	300gくらい	1丁	2本

「鍋はないの？」

この材料なら鍋しか無いでしょ、何故鍋が無い!?

「ごめん、鍋は昨日てゐが割っちゃつて・・・」

てゐ、何故そこまでして俺を苦しめるんだ？

陰謀か？これはてゐの陰謀なのか？

「はあく目の前に鍋が出てこないかなあ」

「いくら幻想郷でも、そんなことはありませんよ。」

やっぱりなあゝそんなこと無いよなあゝ

「だよねーいくら幻想郷でも目の前に『ポンっ』なんて出てくるわけが……」

ー
ー
ー
ボン

[!?!?]

ななななな、なぜ？なぜ鍋が……

「ねえ、これってどう見ても鍋だよねえ？」

「え、ええ。どう見ても鍋ですね・・・」

確かに目の前には鍋がある。でも何故？何でいきなり？

「もしかして、つばめさんの能力じゃないですか？」

「俺の能力？でも俺は能力なんて……」

もしそうだったとしたら、何で目覚めたんだ？

まさか……あの葉が原因なのか！？他には思い当たる節なんて無いし、

「もしそうだったとしたら、俺はいま目の前にガスコンロをだすよ」
 ーポンっ

「……出てきましたね……本当に」

「出てきたね・・・」

本当に俺の能力なのか？なら、

「かき氷・コタツ・みかん・ウサギでろ！」

ーっポンっ

「本当にましたね、でも何で夏にコタツなんて？」

「ノリで、つい・・・というか生物も出せるのか」

目の前にはちゃんと、かき氷・コタツ・みかん・ウサギが出てきてる。

「何だこれ？何で俺が見えるの？」

「え？・・・というか、つばめさんの左目って赤くなっていましたっけ？」

いや、そんなことはなかったはずだけど・・・

（何でこのウサギは俺を見てるんだ？向こう向いてくんないかなあ
〜）

ーっクルリ

え！？本当に向こう向いた・・・

（じゃあ、バク宙を2回go!）

ーっピョンピョン

回った・・・というか俺も目が回った・・・

やっぱり、この左目で見えてるのは、このウサギの視点なのか？

「ねえ、つばめさん今の・・・」

「ああ、バク宙だよ。しかも俺が思った通りに動かせるんだよ」

あ！面白い事思いついた、もっと出したらどうなるのかな？

「出てこい猫x30匹」

お、出てきた。・・・すげえ！全員の視点で見えてるよ、しかも俺が思った通りに動かせるし、消す事も出来るし。

「この能力かなりやばいよ、凄すぎる・・・」

『あらゆる物を生み出す程度の能力』とでも名づけておこう。

さて、鍋食べよう！

猫、目覚める!! (後書き)

相変わらず文才が無いですね〜はい、自覚しています。
でも、どうしようも無いですね〜精進します。

感想・アドバイス・何でもお待ちしています。

これからも、このくだらない小説で、暇でも潰して行っ下さい。

第三話　？　？　双月の世界へ（前書き）

どうも～？さんです。

受験のせいで最近憂鬱です・・・

そんなこんなで次話投稿です。

暇でも潰していただけたら光栄です。

「ゆっくりしていいね」

第三話 ？ ？ 双月の世界へ

「こゝろ居るゝ？」

・ ・ ・ ・ ・

「こゝろあゝ？ おゝい誰も居ないのかゝ？」

・ ・ ・ ・ ・

「はゝい！ 今行きまゝす」

お、やつと来たか

「はいはい、ってまたつばめさんですか？ また今日もゼロの使い魔ですか？」

「もちろん、今日はちゃんと持って来たぞ、ほら。」

そう言っ借りていた本を出した。

「ちゃんと10冊持って来たぞ」

「ええ！！！！！」

なんだその驚き方は？ まるで俺がいつも借りっぱなしにして返さない某青タヌキが出るアニメのガキ大将見たいじゃないか。

「は、はいどうぞ。」

驚き過ぎてなんかおかしくなってるし。

「ありがとう、じゃあ借りてくよ」

いやゝさっきのコア面白かったなあゝ

「さて、帰りながら本でも読もうかな？」

・ ・ ・ ・ ・ ! ?

「何故これがここに・・・」

目の前には、鏡のような物が・・・

「チルノちゃん、待ってゝ速過ぎだからゝ」

「アタイさいきよゝなんだから当然だよ！」

なんだ、大妖精と？か。

「チルノちゃん、前！前！」

それにしてもこれって、才人がくぐったやつなのか？

「まあ、そうだとしても入るきはないけ「うわあ！！」どおお」

あ、くぐっちゃったよ・・・

？め、なんて事を！

「うわああああああ」

「イテテテ、本当にゼロの使い魔の世界へ来たのか？」

「£*#\$?？」

・・・・・・何言ってるの？というか・・・誰？

「◇※%*・・・*○△☆▽¢ψ\$σ・・・・・・」

んゝ本当にわからないんですけど・・・・・・

「えっと、ここってゼロの使い魔の世界なの？」

「!？・・・∂£※※」

えっと・・・やっぱり通じてないのか・・・・・・はあ、ルーン語
覚えてれば・・・

「う、うわあ。何故顔がこんなにちかくに!？」

(・・・コントラクト・サーヴァントだけ？たしかこのあと・・・
)

き、キスされた・・・まあ、可愛いからいいけど。

「い、痛ってゝ!!！」

「あれ？そのあんた、私の言葉通じてる？」

ああゝルーン語が刻まれる時ってこんなに痛かったのか・・・

「一応、わかりますよ。」

「そう、私の名前は『フレデリア・リクセン・ヴァーサ・ラ・フォン・ティアオイエ』よ、わかった？」

えっと、フレデリア・リクセン・ヴァーサ・ラ・フォン・ティアオ

イエ・・・だっけ？

「俺は、小鳥遊 つばめ だけど。フレデリア・・・様が俺の主なのか？」

「タカナシツバメ？あんた、種族は何？」
種族？

「俺の事は、つばめ でいいですよ。種族は猫又です。」

「ネコマタ？それは何の仲間なの？」

「・・・猫です、ただ尻尾が二本あるだけです。」

まあ、本当は色々違うけど、別にいいでしょ。めんどくさいし・・・

「「「つばめ様、付き合ってください！！」」「」」
・・・え？

「ダメよ、彼は私の使い魔なんだから。」
いやいや、何で？

「「「じゃあ、お友達になってください！！」」「」」

「ま、まあそれならいいわよ」
そんな、勝手に・・・

「さて、ルイズはどうだったのかしら？」

才人はまだなのか、

「あ、いた！おーいルイズ」

お、始まるのか？

「宇宙の何処かに居る私のしもべよ、神聖で美しくそして強力な使い魔よ、私は心より求め訴えるわ、我が導きに答えなさい！！」

――ドオオオオオン

「ル、ルイズ！？だ、大丈夫？・・・」

そこには、ルイズと黒こげの何かが・・・（才人だけど）

みんな啞然としている。それは確かにサモンサーヴァントで平民が現れたらそうなるだろうけど・・・

俺は、見た目からして平民じゃないし、というか人間ですらないし、全然okなのだ！！

「お、大見栄切った事はあるわね、まさか平民を呼び出すなんて」
「さすがはゼロのルイズ、期待を裏切らない結果だなあ」
アハハハハ

「あ、あの、ミスターコルベール。もう一度召喚させて下さい」
「それは出来ない」

「な！何故ですか！？」

「この儀式は、メイジとして一生を決める大切なもの。やり直すだなんて、この儀式に対する冒瀆です。」

「おお！さすがミスターツルペールかっこいい！」

「コルベールよ、つばめ。」

ああ！ツルペール見てたら才人のキスシーン見逃した・・・

「ツルペール先生！」

「私はコルベールだ！！誰かね君は？」

「私はフレデリア様に召喚された、猫又の小鳥遊つばめです。」

「するときみも・・・」

「つばめ、私たちも行くわよ。」

「はぁい、了解です」

そういえば、能力って使えるのかな？

『創造発動・猫・三匹・茂み』

――ポンッ

よし、ちゃんと見えてるな。

『創造発動・動物数種類・一万匹・人目につきにくい場所』
んゝ発動を確認、図書館へgo！

「つばめ！何やってんの？早く行くわよ！」

「はゝい、分かってます」

ふんふん、なるほど、そういう事か・・・

俺は今能力を使って図書館の本を一万倍の速度で読んでいる。

ちなみに、内容は全て覚えてる。俺は興味があれば、完全記憶が出来るのだ。そして、魔法の基礎から中級魔法までを完全に使いこなせるようになった。

「つばめく服を着させてよ」

「はいはい、分かりました」

（はあ、これだから貴族・・・だけじゃないなあ、てるとか紫とかによくやらされたか・・・まあそのせいで、もう慣れたんだけどね、）

「おやすみくつばめ」

「ああ、おやすみ」

主も寝てしまい、辺りからは虫の声も聞こえてくる・・・

「本当に来たのかあ・・・・・・ゼロの世界へ」

番外編 ? ?つばめ×バカテス part 1 (前書き)

アクセス500人突破記念の特別編 part 1です

暇つぶしにどうぞ

番外編 ? つばめ×バカテス part 1

「ねえ、つばめさん？」

誰だろ？こんな時間に？

今は夜で、空には二つの月が輝いてる

「はーい？どちら様でしょうか？」

「あなたもよく知っている人よ」

？俺もよく知っている人？

「どちら様で？」

「あら、忘れたとは言わせないわよ」

ガチャ、と扉が開く、そして目の前の人物に驚愕した。

「なぜオバ・・・ゴホン、紫さんがここに？」

「あなた今失礼の事を言いかけなかったかしら？」

う・・・出た、この胡散臭い笑み

「まさか、そんな事ありませんよ、ところでどういった用件でここに？」

「あなたに頼みがあってきたの」

頼みねえ・・・信じらんねえ」

「どんな頼みでしょうか？」

「ちよつとバランスが崩れそうな世界があつて、そのバランスを整えて欲しいのよ」

「えー面倒くさ・・・こっちも使い魔としての仕事があるんだから、」

面倒くさくてやってらんないよ全く、

「もちろん、タダとは言わないわよ、これでどうかしら？」

そう言って一冊の本のような物を取り出した

「そ、それは・・・まさか・・・」

「そう、そのまさかよ」

『？ 橙の日常・特別版写真集』

そう表紙には書いてあった

「なぜそれを・・・」

「あら、私を誰だと思ってるの？ 橙の主の主よ、持っていて当然じゃない、これでどうかしら？」

う・・・

「そんな物じゃあ「なら、これも付けようかしら」それは！！」

『橙の抱き枕・初回限定版特別バージョン』

「行かせていただきます」

「フッフ、さすがに話が分かるじゃない、明日から約二日ぐらいその世界に行ってもらおうわよ、詳しい事はこれを読んでね、じゃあまた明日迎えに来るわね」

分厚い本を置いてスキマに入ってしまった

さてと、読んでみるか、えっとなになに・・・

『連れて行く世界・バカとテストと召喚獣

？？ 詳しい内容・物語のストーリーが原作と違う方向に行ってしまうようなイレギュラーが発生したので、その修正をよろしく♪』

・・・何故に俺？

『P.S. あなたが一番暇そうだったから見事に選ばれました』

暇そう・・・かあ

まあ、いいか

翌日、

「さて、内容は理解していますか？」

「ああ、全部読んだからなあ、ところで紫じゃ無くて今日は藍なのか？」

「はい、藍様は家で酔い潰れてます。何でも博麗の神社で宴会をしたらしくて・・・」

うわあ、人に厄介事を押し付けておいて自分は宴会とはいいいご身分

だなあ、

「では、頑張ってきて下さい」

ここ文月学園は、世界初の特殊なシステムを導入した進学校である。
「では、初めて下さい」

その一つが試験召喚戦争、最先端技術で実現された召喚獣によるクラス間戦争である。

そして、もう一つは成績累進式のクラス設備である。一年の終わりに振り分け試験を行い、その成績によって上のAクラスから下のFクラスまで六段階にクラス分けがされる。

はあくテストとか面倒くさいなあ、適当にやるか、えっとなになにに、『大化の改新はいつ起こったか?』

たしか、無事故の改新だから、645年だな・・・

『平安京に都を移した年は?』

鳴くようぐいす平安京だから、794年だな・・・

「やっと終わった」

「よく言うぜつばめは、ほとんど寝てたくせに」

「あれえ、吉井じゃん、テストどうだった?」

何故かあのオバ・・・ゴホンゴホン、スキマ妖怪のせいで、『昔からの友人』ということになっているのである

「観察処分者の実力なめんなよ!」

観察処分者とは、キング・オブ・バカの代名詞であり、主に先生の雑用係をする者のことである。

「はいはい、明日の結果楽しみにしてるよ」

「ほら、お前の結果だぞ、つばめ」

「は、いい、分かってます」

なになに、『F』・・・はあ

「あれえ？雄二に秀吉それに島田もおんなじクラスか？」

「おお、つばめじゃないか、お前もFクラスか？」

「まあね、テスト中はほとんど寝てたからね、」

「おっす、ってみんな同じクラスか、」

「やっぱりお前もFクラスか、さすがは観察処分者だな」

「ところで、つばめって本気だとどれぐらいとれんの？」

本気かあ、面倒くさいんだよなあ

「さあ、やった事ないからわかんないわ」

「ふーん、そうなんだ？」

・・・それにしても何故机じゃ無くてちゃぶ台なんだ？

『F』クラスだからなのか？

「あ、あの、遅れてすみません。保健室に行っていたら遅くなっちゃって」

「姫路さん？」

な、なんて事だ、このバカと同じ事を言ってしまうなんて・・・

で、雄二とバカは何やってんだ？

「僕は思うんだよ、学校というのは社会の縮図だろ？こんな差別のようなクラス格差があるべきじゃない、でも最下位の僕たちが何を言っても負け犬の遠吠えにしかないから、正々堂々と勝負をいどみ、「つまり」おい！！」

「姫路のために勝負をしてクラスの設備をよくしたいんだろ？」
「ってつばめが何でここに？」

「いやゝたまたま通りかかった時になんかしてたから来てみただけだよ」

「というか二人とも！恥ずかしいから遠回りに言ってるのに、なんで直球になおすんだよ！」

「いいだろ？ 実は俺も仕掛けてみたいと思ってたんだよ、」

雄二まで・・・まあ、俺も見てみたいから良いんだけどね、

「ああ、世の中学力だけが全てじゃ無いって証明したくてな」

雄二かけー

「それに、勝算はある」

え？

「やってみるか？ 明久、つばめ？」

「ああ、やろう、試験召喚戦争を！！」

いいねえ、面白そうじゃん、

「みんな、聞いてくれ、Fクラス代表として提案する。俺たちFクラスは、試験召喚戦争を仕掛けようと思う」

「何じゃと！？」

「試験召喚戦争ってまさか・・・」

ここ文月学園には、試験召喚戦争、通称『試召戦争』と呼ばれるシステムがある。生徒は教師の立会いの元、科目の成績に応じた攻撃力を持つ召喚獣を召喚する事が出来る。その召喚獣によって戦争を行い、上位のクラスに勝利することで、そのクラスの設備と交換出来るのである

「みんな、このオンボロ教室に不満はないか？」

大有りだぁー、とクラスの生徒達は声をそろえた

「だが、試召戦争に勝利さえすれば、Aクラスの豪華な設備を手にする事だって出来るんだ！」

おお！！

「我々は、最下位だ！！」

おお！！

「学園の底辺だ！！」

おお！！

「誰からも見向きもされないクズの集りだ!! つまりそれは、もう失うものなど何もないという事だ!!」

おお!!!!!!

「なら、駄目もとでやってみようじゃないか!! それに、俺たちにはこいつがいる」

そう言って指差したのは、吉井だった、?

「ここにいる吉井明久は、なんとあの観察処分者だ!!」

おお!!

「どうだみんな、やってみないか?」

おおおおお!!!!

「まず手始めに一つ上のEクラスを狙う。明久、Fクラスの大使としてEクラスに宣戦布告して来てくれ、」

「え!? ぼく? 普通、開戦者の大使って酷い目にあうよね?」

確かに、

「それは、映画や小説の中の話だ、大事な大使に失礼なまねをするはずないだろ?」

確かに……って違うだろそれ?

「でも……」

「明久、これはお前にしか出来ない重要な任務なんだ、騙されたと思っ行って来てくれないか?」

完全に騙されてるよ、それ

「騙されたー!!!!」

「やはりな……」

やっぱり……

「予想してたのかよ!」

「当然だろ、そうじゃなきゃ代表は務まらないだろ」

「ねえ、つばめ! 今の聞いたか!?」

「そんなの分かった事じゃないか、」

やっぱりバカだな、

「さあ、これでもう後には引けないぞ、明久、つばめ。覚悟はいいな？」

「「ああ、いつでもこい！」・・・と言いたいけど面倒くさいなあ」

「おい！！つばめ、お前・・・」

「ハハッ、冗談だよ、そんなに怒るなよ」

「ほう、今年の二年は威勢がいいな、一学期早々、試召戦争をやるとは、面白いじゃないか、承認してやるよ」

番外編 ? ?つばめ×バカテス part 1 (後書き)

part 2も書け次第投稿します

キャラ紹介（前書き）

ずいぶん遅れてすみません、キャラ紹介を軽くしておきます。
もしかしたら、間違っているかもしれませんが、
不明な点おかしな点などが有ったらコメントでお願いします。

キャラ紹介

小鳥遊 ？つばめ ？ ？（男）

？？

？東方の世界で住んでいた妖怪。

種族は、猫又。

背は低く、タバサと同じくらい

趣味は読書だが、読みながら歩くと変な所へ行ってしまう。

これが原因で、何度も永遠亭に入院している。

興味がある事に対しては完全に記憶出来る。

能力名

『あらゆる物を生み出す程度の能力』

武器・道具・衣類・食べ物など、何でも生み出す事が出来る。

ただし、生き物を生み出す事が出来無いが、その生き物の形・運動能力・特性・知能などを完全にコピーした意思を持たない人形として生み出し、操る事が出来る。

てゐに飲まされた薬は、能力が使えるようになるのではなく、並列思考が出来るようになる薬だった。能力自体は、ずいぶん前からあったが、強力過ぎて一人では使う事が出来なかったが、並列思考を手に入れた事で使えるようになった。左目だけ赤色で、生み出した動物などの生き物の視点で見える事ができる。

一度にいくらでも生み出す事が出来る。

フレデリア・リクセン・ヴァーサ・ラ・フォン・ティアアオイエ

つばめの主で、魔法使い。

二つ名は『雷光』

風のトライアングルメイジ

学力・家柄共に良い方である。

ルイズとは結構中が良い。

第四話 ？ ？ ？ 平民の使い魔（前書き）

親がうるさくてうるさくて、あ、すいません。

では、どうぞ、暇つぶしに読んでいって下さい

第四話 ？ ？ ？ 平民の使い魔

sideつばめ

「起きて下さいよあるじ」

「・・・・・・zzz」

「あゝるゝじ朝ですよ」

・・・返事が無いまるで屍のようだ

「こうなったら最終奥義『創造発動・猫・五匹』いけゝ猫爆弾、投下ゝ！！」

————ドスン

「ぎゃう！！ビックリした」

やっと起きたか、なかなか起きなかったなあ

「じゃあ着替をしますよ」

「ん」

はい、着替え完了！

？「終わりましたよ」

「じゃあ朝食に行くわよ」

うわあ、広い広い。例えるならホグワーツの食堂くらいかな？

たしか椅子を引くんだっけ？

「どうぞ、あるじ、お座り下さい」

「あら、ありがと。意外と気が利くのね？」

「ほら、才人！普通はああやるのよ！分かった！？」

「はいはい、なんだなんだ？今日は何かの祭りかなんかか？ずいぶん贅沢じゃないか」

「そこは貴族用の席よ・・・あんたはここ←」
才人じゃん、っていうか俺の席って・・・

「あ、あのつばめさん。よ、よかったら私の席をどうぞ
あら？見知らぬおぜうさまAが席を譲ってくれた。

「「何言ってるのよ！！」つばめ様は、私の席に座っていただくのよ
！」」

見知らぬおぜうさまBと、見知らぬおぜうさまCが反論した。

「何言ってるのよ！・・・」

（10分後）

結局、見知らぬおぜうさまBが勝ち、俺はその席に座った。

「・・・何故？」

「「どうぞ、食べて下さい」」

「ハイ、ヨロコンデ」

何故か俺の目の前には普通の人の5倍はあろうと思われる量の料理
が並んでいる。

もちろん、見知らぬおぜうさまたちからいただいた？ものだ。

（こんなん一人じゃ食べきれないよ・・・）

この料理をどうするかと悩んでいた、すると地面に座ってパンを食
べている才人の姿が目に入った。

「おい、才人」

「ん？誰だ・・・？」

ああ、そういえば初対面だったっけ。

「俺は猫又の小鳥遊つばめ、よろしくね、平賀才人君」

「な、なんで俺の名前を・・・」

「そんなことよりさあ、これ食べるの手伝ってくんね？」

マジで無理だって、俺の腹なめんなよ、一人前すら食べきれないん
だぜ！

「本当にいいのか！？ありがとう！！お前は命の恩人だ！！」

「いやいや、こちらこそありがとうだよ、見知らぬおぜうさまたち
から渡されたのはいいけど、俺は一人前すら食べきれないんだよ・

・
」

「ふく食った食った、ありがとなつばめ、おかげで助かったよ。なあ、聞いてくれよ、うちのご主人様ったら酷いんだぜ、人のことを犬扱いするし、拳句には馬用のムチで殴るんだぜ！酷くね？」

「何言ってるんだよ才人、お前は運がいいじゃないか。この世界では、平民だからと言って、殺されることだってあるんだぞ、それに比べたらいい方じゃないか、ちゃんと飯は食わせてもらってるんだろ？」

「・・・まあ、そういう事なら仕方ないのか・・・」

「つばめどこ？」

「じゃあ、呼ばれたから俺は行くわ」

「おう、飯ありがとな」

また、と一言残し俺は主の元へ向かった。

「なんですか？あるじ？」

「ああ、いたいた。向こうでケーキでも食べるわよ」

ケーキって、今さっき朝食だったじゃん・・・

俺の腹はもう限界です・・・

「あれ？あれってもしかしてルイズちゃん？」

「ん？才人も居るなあ、何かやってんのか？」

紅茶を飲みながら俺は答えた。

あれは、才人と・・・ギーシュか、ちよつと待てよ・・・もしかして決闘か？

「あるじく行ってみましようよ？」

「分かったわ、早く行くわよ」

「りょかいです」

「おお、決闘だー！！」

「やれやれー！！」

周りの生徒たちが騒いでる・・・
全く、いい所なんだから静かにしてくれよ・・・

「逃げずによく来たね」

「ばーか、誰が逃げるかよ」

「待って！何をやっているのギーシュ、決闘は禁止されてるはずよ？」

「禁止されてるのは、貴族どうしの決闘だよ。彼は平民、何も問題は無い」

うわぁー出たよそのへ理屈、なんだかなあ・・・

「そ、それは・・・今までそんなこと無かったから・・・」

「ルイズ、君はもしかこの平民にその乙女心を動かしているとか？」

「！？だ、誰がよ。やめてよね、自分の使い魔がみすみすボロクソにやられてるのを、黙って見ていられる訳無いじゃない！」

「ボロクソって・・・」

「君が何を言ったって、もう決闘は始まってるんだ！！」

――ドオオオオン

「う、うわぁ！！」

おお、やっと始まったか、全く原作よりも時間かかってね？

「僕の名は、青銅のギーシュ。したがってこの青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手する」

始まったか、さてと、才人君を助けてあげるか・・・

「あるじ、ちよつと行ってきます」

「え！？ちよつと、つばめ・・・」

――ビュッ

ワルキューレからの鋭い一撃が放たれた、

才人は、その衝撃に耐えるために腕の前でクロスさせた。

side才人」

おかしい、いつまでたっても衝撃がこない・・・

俺は恐る恐る目を開けて正面を見た、

「な、何でお前が・・・」

目の前には、ワルキューレ？の攻撃を片手に持った剣で受け止めて
いるつばめの姿が、

sideつばめ」

「突然の無礼失礼しました、ギーシュ・ド・グラモン様。」

「何だね君は？」

「私は、フレデリア様の使い魔の小鳥遊つばめと申します。この決
闘は、明らかに一方的過ぎてあまり面白くないと思いました」

なんてね、ちよっとこんなセリフ言ってみたただけなんだけど、

「この平民に剣でも持たせてみるのはどうでしょうか？」

「まあ、たしかに、平民の彼では相手にすらならないだろう。よし、
その平民、剣の使用を許可しよう」

よし！まんまとかったよ、この馬鹿は、

「ほら、その平民、この剣を貸してやろう。」

「ちよ、ちよっと、あんた何言ってるのよ！」

ああ、ルイズ居るの忘れてた・・・

「ありがとな、つばめ、ちよっくら行ってくるわ」

そう言って剣を受け取ろうとしたが、誰かに引き止められた、

「アンタ何言ってるのよ！平民のアンタじゃギーシュに勝てないの
よ！今謝ればギーシュだってきっと許してくれるわ・・・」

「俺は、元の世界には帰れねえ、ここで暮らすしかねえんだろ？」

「だから何よ？」

「寝るのは床でもいい、飯はまずくたっていい、しょうがねえから
何だってしてやる」

おおでた！あの名言

「でもなあ！下げたくねえ頭は絶対にさげられねえ！！」

そう言って剣を受け取り、ギーシュに向けた

「「おお!!」」と周りから歓声があがった

「side才人」

つばめから剣を受け取り、ギーシュ? だっけ? に向けた、

「あれ? 何だこれ? 体が軽い」

そう思っているとワルキューレが襲ってきた。

攻撃を躲し剣で一閃、ワルキューレの胴体を切り裂いた。

「どういうこと?」

「分かったからねえ、けど分かるのは余裕で戦えるって事だけだ」

ギーシュがまたワルキューレを出してきた、今度は6体同時だ、俺は構わずにギーシュに向かって走り出す、襲ってきたワルキューレたちを次々と切り裂いていく。そして、ギーシュの目の前で止まった

「ま、参った・・・」

それは、ギーシュの降伏宣言だった。

「おお!!」とか「すげー」とか、様々な歓声があがった

「貴族が平民に負けるなど・・・」

ギーシュは何か呟いている

「大丈夫?」と、ルイズが駆け寄ってくる

「これぐらい、屁でもねえ・・・よ・・・」

――バタリ

と俺はその場に倒れ込み意識を手離した。

第四話 ？ ？ ？ 平民の使い魔（後書き）

受験が厳しいので、次話の投稿は遅くなると思います。

第五話　？　本編とつにゅー（前書き）

えーずいぶん間が空いてしまいました。

いや、本当にすいません

それではどうぞ

第五話　？　本編とつにゅー

side才人

「うう、あれ？ここは・・・」

「私の部屋よ。全く、いきなり倒れたからビックリしたじゃない。つばめに感謝しときなさいよ、彼がこの部屋まで運んできてくれたのよ」

え！？つばめが！？そんなに力が有るのか？

そういえば、ルイズは俺の事をずっと看病してくれてたのか。

「あ、ありがとなルイズ」

「な、何で私に言うのよ、お礼ならつばめに言ってよ」

「看病してくれたんだろ、改めてお礼しようかと思って・・・」

「お礼？何言ってるの？アンタ何か勘違いしてない？使い魔の管理は、主人として当然の事よ」

可愛くねえなあ、

「そもそも、主人に対する感謝の気持ちは常に持っているものでしょ、改めて感謝なんてアンタ本当に使い魔としての自覚がないのね？」

く・・・

「うわあ！」

「くだらないこと言ってないでとっと仕事しなさい！！」

うう、冷てえ・・・

「全く、無駄にひらひらしてて洗いにくいっての」

ちくしょう、何で俺がこんな事をしなくちゃいけないんだよ

――カーン

鐘の音が鳴った、ぞろぞろと他の生徒たちが出てきた

「ちょっと！教室までのお供もしないで、洗濯にいつまで時間かけてるのよ？全く、使えないんだから、洗濯干したらさっさと教室来なさいよ！分かったわね！！」

「へいへい、分かりましたよ」

はぁ・・・

side つばめ

「みなさん、二年生への進級おめでとう。今年度からこのトリステイン魔法学院に赴任しました、ミセスシュヴルーズです。属性は土、二つ名は『赤土のシュヴルーズ』、これから一年間土系統の魔法をみなさんに講義していきます。さて、みなさん、魔法の四大系統は？」

えっと、たしか・・・

「火・水・風・土の四系統です。そして、なんたる奇遇、僕の属性もミセスと同じく土、二つ名を『青銅』のギーシュ・ド・グラモンと申します。お見知りおきを」

そうだ！それだ、そう言えばここで確かにギーシュが、自慢気に言ってたなあ、

才人の奴遅いなあ、まだ洗濯してんのか？仕方ない、見にくいか・・・
えっと、あそこだとスズメが一番近いな、

ああ、いたいた。忠告でもしてやるか、

「おーい、才人」

「うわぁ！！だ、誰だ！！」

・・・どんだけ驚いてんだよ、

「俺だよ、俺、分かる？つばめだよ」

「つばめ？どこにいるんだ？」

「ここ！君の目の前に居るじゃないか！」

「スズメが喋ってる・・・」

失礼な、誰がスズメ・・・あ、俺今スズメか、

「わかんないかなあゝ操ってるの」

「なるほど、で、どうしたの？」

「お前んとこのご主人様がものすごく怒ってるよゝ」

半端なくね・・・

「な！！頼むつばめ、手伝ってくれよ」

おお、これがニホン文化の☆DO☆GE☆ZA☆か、

「仕方ねえなあ、ちょい待ち、今他のも呼んでるから」

えっと、何がいいかなあゝテナガザルでいいか、

『創造発動・テナガザル・10匹・上空30m』

――ースタツ

10匹のテナガザルが降りてきた、

「はいよ、助っ人だよゝ」

「・・・マジで？」

「やっと終わったゝ。そういえばさっき何したの？」

「ほ、ほら、才人！急がなくていいのか？もうカンカンだぞ・・・」

「ヤバイ！！そういえばそうだった！！ありがとな、つばめ」

「おう、教室で待ってるよゝ」

才人は、全速力で走りだした、

さて、読書の続きといきますか・・・

――ボタン

「すいません、遅れました」

才人が教室に入ってきた、

「あら、あなたはミス・ヴァリエールの使い魔の。ミス・ヴァリエールならあそこですわよ」

そう言ってルイズを指差した

「ありがとうございます、先生」

「アンタ本当に使えないんだから、たかが洗濯にどんだけ掛かってるのよ」

「そんな事言っただって、あの量はどう考えてもおかしいだろ？」

「まずは、錬金の魔法を教えます。・・・£？*£¢」

先生が呪文を唱えると、机の上にあった石が金色の石のような物に変わった

「先生、それってゴールドですか!？」

「いいえ、真鍮です。それでは、誰かにやってもらいましょうか・・・ではあなた、名前は？」

「ルイズ、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールです」

「あ、あのく先生、やめておいた方が・・・」

「危険過ぎます! ルイズがやるくらいなら私が」

「危険? 錬金の何が危険なのですか？」

おお、ルイズの爆発か、

「やります! やらせて下さい!!」

「よろしい」

さて、どうするか、巻き込まれるのはいやだし・・・そうだ能力で壁を創ればいいんだ!

『創造発動・不可視の壁・付属効果…物理的攻撃無効』

手を前に出して、軽く振った。すると、何も無い空間に波が起きた
————ドゴオオオオン

そして、ルイズによる爆発が起きた。

まあ、埃ひとつ飛んでこないから別にいいんだけど、

「あれ・・・何とも無い？」

「どうしたんですか、あるじ？」

「いや、でも・・・」

まあ、そうなるわ普通、だって教室は一部(俺が居る所) 以外は爆発の影響でボロボロ、教卓は木っ端微塵になってるし

「今のは……」

「はい、俺が防いどいたけど……」

「つばめ、あんたって何者なの？」

「俺は、フレデリア様の使い魔で、猫又の小鳥遊つばめですよ♪」
まあ、あるじには俺の能力について教えておこうかな

Side コルベール

一方図書館では……

「あつた！やはり彼、ヒラガサイト君は伝説の使い魔『ガンダール
ヴ』だったのか、学院長に報告しないと……何だこれは！
？」

彼、コルベールの居る図書館には、動物達（つばめが出した）が本
を読んでいたのだ

「……はっ！追い払わなては！」

そう思い、魔法で追い払おうとした

「ちよっと、ツルペール先生！本を読んでいるのを邪魔しないで下
さいよ！！」

「私はコルベールだ！！その呼び方はたしか、つばめ君か？ミス・
フェールの使い魔の……」

「御名答うたしかに俺はつばめです」

どこに居るのだろうか？周りを見ても動物達しかいない

「どこに居るんだ！早く出できなさい！」

「目の前に居るじゃないですか」

1匹の鮮やかな鳥が飛んできた

「はい、来ましたよ」

「何で鳥の姿なんだ？」

「いや、えっと・・・何と言えば良いのか・・・これは俺であって、俺じゃありません」

何を言ってるんだ？

「えっと・・・本体の俺は、教室で授業中です」

授業中？でもここに・・・彼であって、彼じゃない？

「今からそっちに行くから待ってなさい！」

「待ってる何も授業中ですから」

そう言っつツルペール先生は行ってしまった

――バン

「小鳥遊つばめ君は居るか！・・・って何だこの状態は？」

本当に来たよ、まあ動物達で付けてたんだけど

「はいはい、ここですよ」

「ちよっと、来なさい！」

「じゃあ、あるじ、ちよっと行って来ますね♪」

そう言っつ座つた席からジャンプで一氣にコルペール先生の正面に飛んだ

「つばめ君、今すぐに図書館の動物達をなんとかしなさい」

ええーまだ読み終わって無いのに・・・そうだ！このまま図書館にいけばいいや

「じゃあ、ちよっと行って来ます」

「さて、私もついて行く」

え！？俺の作戦が・・・

「分かりました、じゃあさっそく行きましょう」

ふう、まだ半分も読んで無いのに・・・

「さあ、早くどうにかしなさい」

はいはい、

「回収！」

そう言っつて、手を1回叩いて動物達を消した

「はい、終わりましたよ。それより、学院長にガンダールヴについての報告はしないで良いんですか？」

「そうだった、早く報告しなければ・・・ってどうしてその事を知っているんだ？」

あ、やべ・・・

「動物達が聞いてましたから」

「そうですか・・・」

さてと、本の続きでも読もうかなあ

「じゃあ、つばめ君は教室を直すのを手伝ってきなさい」

え！？そんな・・・

第六話

「なんで俺が・・・」

今、俺はボロボロになってる教室で座っている

「ちよっと！そこに座ってないで手伝ってよ！」

そう、なぜこんなにも教室がボロボロか？それは、今俺の正面に偉そうに立っているルイズが授業中に爆発を起こしたからだ。

「何か面倒くさいから、魔法を使って終わらせようぜ」

まあ、魔法は使っちゃいけないんだけど

「で、でも魔法の使用は・・・それに誰が魔法を使うのよ？言っとくけど、私は・・・何でも無いわ。で、どうするのよ？」

「俺がやるから別に良いよ」

「でも、あんたは貴族じゃないし・・・」

いや、別に俺だって使えるから

「はいはい、じゃあいくぞ・・・ほい、完璧だな」

「う、嘘でしょ・・・」

これぐらい朝飯前だぜ！

「ねえ、あんたって魔法薬とか作れる？」

魔法薬？そんなの本編には無かったけど・・・

「作れるの？作れないの？」

「多分作れると思うけど、何で？」

永遠亭にあった医学書とこの学校の図書館の医学書を使えば何とかなるかな・・・

「治して欲しい人が居るの！私のお姉さんで、カトレアって言うんだけど」

カトレアさんかあ、こんなに早く治して良いのかなあ

「つばめ〜どこ行ったのよ〜」

あるじ？

「あ！居た！どこ行ってたのよ・・・っていうか教室直ったんだ」

「あ！フレデリアじゃない！ちょうど良かった、彼を少しの間貸してくれない？」

「彼？もしかしてつばめの事かしら？」

「そうそう、彼にちよつと頼みがあつて」

ちよつと待てよ・・・

カトレアさんを治す

?? ? ? ? ← ?

ルイズの家に行く

?? ? ? ? ←

ルイズの両親と会う

?? ? ? ? ←

怖い！！

特にあのお義母さんはまずい、怖すぎる

「いや、でも使い魔としての仕事だつてあr「別に良いわよ」ええ！？」

「別に用事なんて無いし。っていうか魔法使えたんだ？本当に何者なの？」

「よし！了解も得た事だし、行くわよ！」

本当に行くんですか・・・

「いつ行くんですか？」

「今すぐよ！さあ、さっさと行くわよ！才人はどこかしら？」
今すぐ！？流石にそれは無いでしょ

「どうしたんだ？ルイズ・・・とつばめ」

「才人！助けてk「出かけるわよ！さっさと準備して！」・・・」

「出かけるってどこへ行くんだ？」

「私の家よ、こいつにやって欲しい事ができたの」

はあゝこんな事になるなら、魔法なんて使うんじゃ無かった・・・

「でも、そr「命令よ！早く準備して！」分かったよ！準備すれば良いんだろ」

「学校の事は私が何とかしておくから」
あるじ・・・マジでやめて

はあ・・・着いちゃったよ

「広っ!!」

そりゃそうでしょ才人

「何やってんの？さっさと歩きなさいよ、置いてくわよ」

「へいへい、今行きますよご主人様」

「これはルイズお嬢様、お帰りなさいませ。そちらは？」

「犬と友達の使い魔よ、カトレアお姉様はいるかしら？」

「はい、ただいま門を開けますので」

ギィィィ

と音を立てながら門が開いた

庭にルイズのお義母さんのカリーヌさんが居た

「お母様!」とルイズは飛びついた

「こんにちは、えっとルイズのお義母さんですか？」

さすが才人、怖いもの知らずだ

「はい、貴方は？」

「私の使い魔です・・・」

「・・・」

ヤバイ・・・何か空気がまずいことに

そしてカリーヌさん、怖すぎです

「・・・そう。では貴方は？」

俺ですか？

「彼は私の友人の使い魔で、つばめです」

「つばめ？面白い名前ね」

・・・ほっとけ

「彼がカトレアお姉様を治してくれるのよ！」

「彼がねえ・・・とてもそうは見えないけれど」

失敬な！！

「私が案内して差し上げますわ」

何ですかその笑顔は？怖すぎですよ・・・

何かあのおば・・・紫さんみたいな胡散臭い笑みを浮かべている

「あの子はこっちは屋敷から離れていてますけど」

「いいのよ、こっちで」

どこ行くんだろう？

少しすると、開けた場所に着いた

ここか？特に何も無いけど

・・・ッ！？

殺気と何かの魔法の詠唱が聞こえたので、大きく後ろに跳んだ

「よくよく避けられましたわね。まあ、そうでないと困りますけど」

あぶねーさっきまで居たところにクレーターができています

「つまり、戦えという事ですか？」

「ええ、その通りです。本気で来ないと死にますよ」

仕方ないか・・・じゃあ久しぶりに本気を出しますか

「では、行きますよ『ウインディ・アイシクル』」

小さな氷柱が飛んで行く。まあ、数は50ぐらい

「杖無しで魔法を使いますか、それでもまだまだですね『エア・ハ

ンマー』」

あの数を一撃ですか、やっぱり恐ろしい

「その程度ですか？それなら貴方は死にますよ『エア・ストーム』」

いきなりトライアングルスペルですか、ならこっちも

「行きますよ『エア・ストーム』」

お互いの魔法がぶつかり合い土煙が巻き起こった

「なかなかやりますね、でもそれでは私と同じかそれ以下ですy・・
・ッ!!」

当たったかなあ？咄嗟にエア・ストームとジャベリンの同時詠唱
同時詠唱って意外と簡単ですね

土煙が晴れてきた

そこには、ボロボロのカリーヌさんの姿が

「さてと、早く本番を始めましょうよ、カリーヌさん」

そう言いながら後ろに振り向いた

「よく分かったわね、あれが『偏在』だって」

そう言いながら何も無いところから、カリーヌさんが現れた

「ええ、まあ詠唱が聞こえてましたから」

「その耳は飾りじゃないって事ね」

まあ、他にも蛇やら鳥やらを小さくした物を体の周りに展開させて
ますから、常に360度見えてるけど

「ええ。では、貴方が見た事が無い魔法を使わせてもらいますよ」
妖力を生み出し、自分の周囲に放出する。それを手の上で魔力と合
わせて魔法を発動させる

「行きますよ、『桜火』」

手の上で桜のようなピンクのファイアーボールが発生した

「何なのその魔法は!？」

「これは防げますか？」

そう言いつてピンクのファイアーボールを放った

「くっ!!」

ーードオオオン

爆音と共に土煙が舞った

「へえ、エア・ハンマーを圧縮して盾にしましたか、結構器用なん
ですね」

「それはどうもありがとう。けど、後悔する事になるわよ『偏在』」
また偏在か、何をする気だ？

「『これが私の全力よ』『カッター・トルネード』『』」
偏在からのカッター・トルネードか

「3重の壁『エア・シールド』『ウォーター・シールド』『ファイアー・ウォール』『』」

あつぶねーまさか2枚目も破られるとは・・・

「そんな・・・私の全力だったのに」

「では、今度は俺の番ですね？行きますよ『フォースオアカインド』」

「この技は、フランのスペカの真似だ。つと言っても、偏在で4人に分身しての攻撃なんだけど」

「『「これで決めます」』『』」

『桜火』

『蒼火』

『緋火』

『翠火』

四色のファイアーボールが飛んで行く

「守りきれな・・・」

ーードオオオン

やり過ぎたか？

そこには、倒れて居るカリィヌさんが居た

「大丈夫ですか？ちょっとやり過ぎました」

そう声を掛けながらヒーリングを使用する

「ええ、大丈夫よ。それにしても貴方、強いわね」

「ありがとうございます」

「それでは、屋敷へ行きますs「お義母様！！ご無事ですか！！」ルイズ！？どうしたの？」

「つばめ・・・あんた何やってんのよ!!」

そう言いながら杖を振り上げた

「え!?! ちよつとまっ「うるさい!! あんたって奴は!!」魔法はまづいって」

『動物×20匹』創造!!

動物を目の前に生み出して壁を創る

ーヒュッ

という音と共に杖が振り下ろされ、爆発した

ーーードオオオオオオオン

「つたく危ねえな・・・」

動物達はボロボロに、ついでにルイズや才人、カリヌさんもボロボロになっている

「いいから、落ち着けって」

才人とルイズに、ヒーリングを掛けていく。カリヌさんは自分でヒーリングを掛けている。

~~~~猫又説明中~~~~

「・・・という事、分かった？」

「何だ、そうだったのね。てっきりつばめから攻撃をしたのかと・・・」

何でだよ・・・

「さあ、早くカトレアお姉様の所行きましょう!」

それで終わりかよ!?! 謝罪は無いのか?

## 第七話（前書き）

少し遅れた・・・かな？

どうか生暖かい目で見守って下さい



## 第七話

Side つばめ

「ちい姉さま!!」

部屋に入るや否やルイズはカトレアさんに飛びついた。

カトレアさんって、身体が弱いんじゃない・・・

それにしても本当に動物がたくさん居るんだな。犬に猫に兎、インコにワニまで・・・ってワニ!? 何でこんな所にワニが居るんだ? 食物連鎖は成り立って無いのか!?

「あらルイズ、帰ってたの?・・・それでそちらの二人はどなたかしら?」

俺達の事か? っていうか才人が部屋の動物達をみて固まってるし

「初めまして、カトレアさん。俺は小鳥遊つばめです。フレデリアさまの使い魔をやっています。こっちは平賀才人です。それにしてもずいぶんと賑やかな部屋ですね」

「あら、貴方もずいぶんと面白い子達を連れているじゃない」

ふふっ、と笑いながら答えるカトレアさん

「え!?! もしかして、こいつ達の事見えるんですか?」

・・・嘘だろ

こいつ達というのは、能力で創り出したマイクロサイズの動物達のことである

「ええ、猫に鳥に蛇まで。色々居るんですね」

本当に見えてる・・・ある意味恐ろしい人だ

「ねえ、さっきからちい姉さまとつばめは何の話をしているの?」

「別に何でも無いわよ。ねえ、つばめさん?」

振らないで欲しかった・・・というかその顔はわざと振ったのか

「べ、別に何でも無い・・・よ・・・」

才人に助けを求めようと思ったが、ワニに食べられかけてたので、その案は却下された

「本当に本当？」

「・・・そ、そんな事よりも本来の目的を果たさなきゃ」

何とか逃げ切れたみたいだ。

ディティクトマジック

「ちょっとすいません、『探知』を使わせてもらいますよ」

手を前に出して『探知』を使用する

そして、リビングに戻ってきた

「どう？治せそう？」

・・・微妙だな。治せるけど材料が無いし、能力で創ると若干効果が弱くなるし・・・

「一応この材料があれば、治せると思う」

そう言いつて、紙に材料を書き出していく

「お母様！」

「ええ、もちろん分かっています。お金をいくら掛けてでも集めますわ。届くまで時間が掛かります、貴方達は学院へお戻りなさい。届いたら連絡するわ」

カリィヌさんは紙を持って部屋を出れ行った

それなら平気だな

「・・・ZZZ」

「ちょっと、まだ授業中何だから寝ないでよ」

えー現在学院に戻ってきて、バリバリ授業中です。担任はなんとあのギトーです。

「ちょっと、あ・・・先生がきたわよ」

どうでもよくね？だってギトーだろ、授業やってねーし

「おい！起きろ！何寝てんだ！」

うるせーそして、面倒くさい

「何ですか？」

「何ですか、だと？・・・まあいい、魔法の中でどの属性が最も強いかな答えてみる」

はあ・・・確かこいつは風のメイジだったっけ？

「時と場合によるでしょ、一概にどの属性が最も強いかなんて決められるわけ無いだろ、そんな事もわかんねーのか？あんた馬鹿だな、そんなんでよく教師やってられるな」

寝てる時に起こされるとムカつくよねー

「き、貴様いい度胸じゃないか！表へ出ろ！貴様に決闘を申し込む！！」

別にいいけどさ

「ちょっと、相手はスクウェアアクラスで先生よ！絶対に勝てないわ！やめなさい！これは命令よ！」

あるじ・・・少しぐらいは信じてくれよ

「もう遅い！さっさと表へ出ろ！」

はいはい、分かりましたよ

「じゃああるじ、ちょっと行ってきます」

「ちよっとまっつ」

最後まで聞かずに窓から飛び降りた

生徒達は教室から、外では俺とギトーが向かい合っている  
面倒くせ………

「ルールなど無い！参ったと言わせれば勝ちだ！！分かったか！」  
「はいはい、いつでも良いですよ」

何を使おうか？まあ、最初は初級の魔法でいくか

「喰らえ『ファイアーボール』」

小さな炎の塊がギトーに向かって飛んで行く

「魔法が使えるのか、そんな事で勝てると思うなよ！『エア・ハンマー』」

風の塊がファイアーボールを打ち砕く

やっぱりダメだったか

「じゃあ、これでどうだ『ウインディ・アイシクル』」

周囲に氷柱が発生し、ギトーに向かって飛んで行く

「無駄だと言っている！『エア・カッター』」

氷柱はエア・カッターとぶつかり合い、粉々に砕けた

Sideフレデリア

「じゃあ、ちよつと行つてきます」

「ちよつとまっ」

言い終わる前に窓から飛び降りてしまった

「ああ・・・じゃなくて、止めに行かないとつばめが死んじゃう」  
窓からフライを使って降りようとしたが、グイグイと袖を引っ張られた

「何すんの？・・・って、タバサ!？」

何と袖を引っ張ったのは、あの無口っ子のタバサだった

「大丈夫。彼、強い」

「え!？」

突然そんな事を言われて、変な声を出してしまった

「そうね、つばめならあんな奴に負ける筈無いわ。彼は私のお母様に勝った男だもの」

「もう! ルイズまでそんな事・・・」

しかし、本当にルイズのお義母さんに勝ったのだろうか?  
・・・いやいや、今はそれどころじゃない。

「分かったわよ、私も此処から見れば良いんでしょ」

side つばめ

「いくぞ! 『エア・ハンマー』」

面倒くさいなあ

「『ブレイド』」

飛んできた空気の塊をブレイドを使った右手で一刀両断する  
ーードオオオン

左右に分かれた空気の塊が地面にぶつかり、小さなクレーターをつ  
くった

「ったく、スクウェアクラスはその程度か? 拍子抜けだぜ」

このセリフ？ 幻想郷に居る時に読んでたマンガの主人公のセリフをパクってみた

「ふ、ふざけるな！！いいだろう、全力で貴様を葬ってやる」

「へえ、やってみれば♪」

「貴様・・・喰らえ『カッター・トルネード』」

スクウェアの魔法ですか。さて、どうしようか

1、此方もカッター・トルネードで返す

2、ブレイドで一刀両断する

3、スペカで魔法・・・というかギトーごと消し去る

やっぱり、1か2が無難かな？

3は最後の手段という事で、2かな？

「霊力・妖力・魔力、全ての力を開放！いくぜ『超強化版ブレイド』

」

## 第八話（前書き）

えーこんばんわ、？です

感想のおかげで、何とか課題と並行しながら書き上げる事が出来ました

もう、感謝感激雨霞ですネ

それではどうぞ

ゆっくりしていつてね♪

## 第八話

sideギトー

「ば、バカな・・・」

あのスクウェアクラスの魔法をブレイドで一刃両断しただと・・・か、勝てないそう確信した。

「く、クソがああああ！！！！」

半ばヤケクソになって奴に突っ込んだ

sideつばめ

「く、クソがああああ！！！！」

何か叫びながらギトーが突っ込んでくるハッキリ言ってるキモイ。どうせダメージなんて喰らわないし、もうそろそろ終わらせるか♪

「何にしようかな♪よし、あれでいこう。『ミスティルティン』伝説の剣？を取り出した

「行くぜ！小鳥遊流剣術三の型『鈴蘭』」

サマーソルトを決めて敵を蹴り上げ、落ちてきた所に走り込んで剣の柄で殴り飛ばす

実際には斬りつけるのだが、此処はゼロ魔の世界だし、学院内でしかも原作キャラを殺すのはマズイと思って、咄嗟に柄で殴り飛ばす事にしたのだ

「ふう、まあ上々かな♪」



ボロボロになった地面は、錬金で直しておく

「それではギターせんせい、お先に失礼します♪」  
そう言い残して教室の窓までジャンプする

「ただいま」

《・・・・・・・・》

あ、あれえ？おかしいな、何か不味い事言ったのか？

「さすがは私の使い魔ね！あのスクウェアクラスのギターを倒すなんて」

そう言えばあるじに能力の事話して無かったな

「あるじ、ちょっといいですか？」

「ん？」

そのままあるじを連れて図書館に行く

「・・・・かくかくしかじか、って訳です。ok？」

「えーっと、まあ何となく」

よし、どうやら伝わったみたいだ

「でも、そんな事って・・・」

ええー信じてないの？

あ、じゃあ一回見せれば信じてもらえるな、よし

「じゃあ何か創るから創って欲しい物ある？できれば、食べ物はやめた方がよいよ。創れるけど味が落ちるし、ハッキリ言って不味いから」

「じゃあ、動物とかは平気なの？」

「全然平気だよーむしろ得意だし♪」

常に動物は創って周りに展開してるし、一番使う事が多い能力だし

「じゃあ・・・サラマンダー？」

何故疑問形？

「分かりましたー創造発動『サラマンダー・1匹』」  
ーポン

サラマンダーが生み出される

「す、凄い！じゃあじゃあ、風龍と火龍も出して」

いきなりですか、しかも部屋の中に生み出すのは危険だし

「じゃあ、サイズを変えて手のひらサイズでも良いですか？」

「全然OK。と言うかそっちの方が良いかも」

創造発動『火龍、風龍・1匹ずつ』

ーポポン

「これで良いd「キヤー！！可愛い」・・・満足みたいですネ」

はあ、とため息を吐く

（喜んでくれるならいいか）

そんな事を考えていると不意に声をかけられた

「あんたって本当に最高の使い魔だわ」

「あ、ああ。ありがとうございます」

いきなり過ぎるでしょ

まあ、褒められて嬉しくない奴なんて・・・此処にいるか

どうして嬉しくなくなったかと言うと、少し前・・・300年前までさかのぼる

（300年前）

俺はある偉大なお方のペットであり、式であった。正確にはあの方の式の式であった。

そしてある日、俺の主・・・つまりあのお方の式からこんな事を言われた

「あんたってなんでそんな簡単に死ぬの？」

主は訓練と言う名のイジメの最中に突然言ってきた

そして、この後俺は不老不死になる薬を飲まされた

もちろん俺は反論しようとしたけど

「不老不死になって困る事もあるの？」

と言われ、何も出来なかったのだ

死ななくなった俺の事を主は褒めてくれた。でも、生まれて初めて

褒められたのに【どんなに攻撃しても死なない】というのが理由だ  
とどう思うだろう？もちろん褒められるという行為が俺の中での恐  
怖・トラウマとなった。

「はぁ・・・」

嫌な事思い出してしまった

でも、俺の主の主はとても優しい方で俺の憧れだった

何故なら、ただ優しいだけで無くトップクラスの実力を持っていて、  
仲間（俺達）を守る為に力を使う、神様みたいなお方だったからだ。  
いや？神力を持っていたから神様なのか？

「それに比べて俺の主といったら・・・」

主に対しては完璧な忠誠心を持っているが、俺の扱いが酷すぎる。

例えば、暇だと言って俺を半殺しにしたり、昼寝の最中にナイフで  
刺したりe t c・・・

それでも、時々は優しくかったりもする。

「どうかしたの？・・・もしかして、何か気に障る事言っちゃった  
？」

「・・・いえ、何でもないです。すみません」

そんな顔してたかな？

「何で謝るのよ。・・・まあ良いわ、みんなの所へ戻りましょう」

それもそうだな、と思い

「はい」

と、心配させないように明るく返事をする

「あら二人とも、もう話は終わったの？」

ルイズが話かけてくる

「ええ、まあ。・・・って、ルイズの使い魔は？」

そう言えば才人が居ないな・・・

「あいつ？洗濯物を洗いに行かせてるわよ」

・・・相変わらずルイズは人使いが荒いなあ。才人、頑張れ

side才人

「ううう・・・冷てえし、腹減ったし疲れたし・ルイズは人使いが荒いし・・・はあ」

ついため息が出てしまう

(何やってんだろ、俺？)

「才人・・・さん？」

「うわあ！！すいません、ほんの出来心で本気で思っている訳でh

「才人さんですよね！」・・・ルイズじゃ無い？」

不意に声を掛けられルイズだと思い動揺して変な事を言ってしまった

「やっぱり才人さんですよね！」

「ああ、確か・・・「シエスタです」そうだ、シエスタだ！どうしてこんな所に？」

(まさに俺の為に・・・)

「洗濯に来ました」

(・・・ですよ、俺なんかの為に来てくれる筈無いよな)  
はあ・・・

「あ、あの！」

頬を少し朱に染めながら話しかけてくる

「こんd「サ〜イ〜ト〜」え？」

「る、ルイズ・・・と、みんな？何で此処に居るんだ？」

ルイズ達が向かって来ている

「えっと・・・どちら様でしょうか？」

ルイズ・つばめ・フレデリアさんは分かる、けど・・・あとの二人は初めて見る人達だ・・・

「ダーリン！！」

「うわっぷ！」

突然抱きつかれた。うん、悪い気はしない

（うわぁ・・・この人の胸デカイなぁルイズとは大違いだ・・・）

「才人、今何を考えてたのかしら？」

ヤバイ、ルイズがものすごく怒ってる。こうなったら何とか言い訳をして・・・

「えっと、そn「彼女の胸はルイズとは比べ物にならないぐらいデカイなぁーっと思っていました」ちよっ、つばめ！何で分かったn

「こ、この馬鹿犬！！！！」・・・ぎゃあああ」

## 第八話（後書き）

それでも課題は残ってます・・・

終わるかなあ・・・

## 第?話(前書き)

えーっーっつと、とわです。

結構放置してる間に読んでくれている人が増えていて、正直言っても驚いてます。

久しぶりの投稿で短いです。はい。

相変わらずのgdgd感が否めない……

反省はしている、だが後悔はしてないn (ry  
まあ、そこらへんは置いといて

ゆっくりしていいね♪

## 第?話

side才人

「うう、寒い」

俺はベッド・・・では無く、床に敷かれた藁の上で寝ている

「何でこんな所で寝なくちゃいけないんだあ!!」

「何よ、朝っぱらからうるさいわねえ。・・・あんた誰？」

こいつはルイズ。こいつが俺をこの世界に召喚したらしい

「はあ？人の事を勝手に召喚しておいてそれは無いだろ！」

「ああ、はいはい。・・・はあ、夢じゃ無かったのね・・・」

それはこっちのセリフだよ

全くなんでこんn「着替」奴の使い魔なんk「着替!」・・・

「何だよ！」

「早く着替えさせて」

「はあ!？何で俺がお前を着替えさせなきゃいけないんだよ！」

意味わかんねし

全く、これだから貴族ってヤツは嫌い何だよ！

ーバン!!

「おい！才人く生きてるか？」

つばめ!？何でイキナリ入ってきた・・・って言うか、生き

てるかって何？酷くない？

「何やってんの才人？」

「何ってこいつが俺に着替えさせるとか言うんだぜ！酷いと思わな  
いか？」

「・・・別に」

うわぁ・・・そうだよ！種族の違いってヤツだよきつと。うん、そ  
うに違いない



「才人、郷に入っては郷に従えってことわざ知ってるか？」  
う………

「分かったよ！やればいいんだろ！………ところで、つばめも着替えさせてるのか？」

これはかなり気になる。つばめがやってるなら俺もやるけど

「ん？まあ、やってるって言ったらやってるけど、やって無いって言ったらやって無い」

つまり………どういう事？

「えっと、もっと分かりやすくお願いします」

「つまり、こういう事だよ」

ーパチン

と指を鳴らすと、5・6匹ぐらいの動物が突然現れた

「「え………」」

ちなみに、今声を出したのは俺とルイズだ

「何……ソレ？」

「ウソ……でしょ……」

あり得ない！って言うか、こいつ（つばめ）は何者なんだ？

「ん？こいつ達は俺の能力で生み出したペットだよ」  
ノウリヨク？何の事？

「何でそんな事が……」

ずるいぞつばめ！お前は味方だと思ってたのに！

「あんた、他にもなんか出来るの？」

くsideつばめく

「あんた、他にもなんか出来るの？」

他にかあ、出来るけどなあ……一応最後の手段扱いの代物だし

「出来るけど、見せるのはまた今度って事で」

「いいじゃん、ちよっとだけ」と、才人が言い寄ってくる

ええく面倒くさ。そして才人よ、腕を引っ張らないでくれ抜けるだ

ろ・・・ん？抜ける？そうだ、面白い事思いついた

「なあゝつゝばゝめゝ頼むよお・・・って、うわあ！！う、腕が」  
スポツと腕が抜けた

「・・・キャアア！！」

やっと現状を理解したルイズが悲鳴を上げる

「腕が！腕が！」と、二人で騒いでいる

「おい！つばめ！大丈夫か？」

体を揺すりながら才人が聞いてくる

ーポロ

頭が地面に落ちる

「あわわわ・・・」

ーボタン

ルイズは泡を吹きながら気絶してしまった

「・・・」

才人は口を開けたまま固まっている

（あやや？ちよつとやり過ぎたかな？）

「うそウサ☆」

・・・そして沈黙

「つまり、今のは全部嘘って事？」

「嘘じゃ無くて妖術ね」

「変わんねえ」

失礼なっ！圧倒的に妖術の方がレヴェルが高いんだぞ！しかも、俺

の妖術は橙様に教えてあげる為に極めたんだぞ！・・・でも、妖術を扱う程度の能力だったなんて・・・俺が教えられた事はほんの少しだったけど

「つばめーいつまで待たせるの？あれ？まだルイズは寝てるの？」

あ、あるじ

「いや、あの・・・ちよっと妖術使って悪戯してたら、気絶しちゃって」

反省はしている、でも後悔はしていない

「よ、妖術！？」

・・・嘘です。かなり後悔してます。

「ただ、腕と頭が落ちるような幻術で・・・ははは」  
あるじ怖いよーまあ、師匠よりましだけど

「それ、悪戯のレベル越えてるわよ」

デスヨネーはい、分かります

「あれ？何で私寝て・・・」

あ、ルイズが起きても

「つばめの頭が！！」

ーボタン

また気絶しちゃった

（やっべえ、これはトラウマになりそうな予感）

「ルイズが起きるまで出掛けられないわね」

「本当すみません」

「いや、まあ、次から気を付ければいいから」

くう><あるじが優し過ぎる

「全くだZ「才人は黙ってろ！」・・・痛てっ」

何か口を挟もうとしていた才人を黙らせる

――そして数分後

「ふああ・・・何で私寝てたのかしら？あれ？どうしてフレデリアがここに？」

「おはよう、ルイズ。迎えに来たのよ」  
「ん？やっと起きたのか？」

「迎え？・・・ああ！もうこんな時間じゃない！サ～イ～ト～」  
そのまま持っていた杖を振り上げ・・・

「ま、まてルイズ！これには訳があつてだな」

「うるさい！イクスプ r 「させるか！マジックブレイク！」・・・え？」

ルイズが溜めていた魔力が掻き消された

「危なかったあゝおい、ルイズ！ここは部屋の中だぞ・・・って、何でみんな俺を見てるの？」

「い、いや・・・だって、そんな魔法初めて見たから・・・」  
「ん？そうだったっけ？」

「そんな事よりも、ルイズは覚えて無いの」  
「ナイスあるじ！そこに痺れるあこがれ（ry

「覚えてるって何を？」

「どうやらルイズは覚えていないらしい。いや、脳が勝手に記憶を消去したのか？」

「ん～なら良いんだけど、早く授業に戻るぞ」

「そうよ！授業があるじゃない！もしかして、サボり扱いに・・・」

「あ、その心配は無いよ～だって俺が創った偽物を授業に出してるから」

「いや、俺の能力って最強じゃ n……………嘘です。」

「でも、どうやって入れ替わるんだ？」

良い質問だね、才人くん！

「それは、ルイズ（偽）に魔法を使わせて・・・」

「ああ！爆発が起きるからそれに紛れて入れ替わるのか！」

なかなか察しが良いんだな、もっと馬鹿なキャラだと思ってたんだが・・・

「そ。分かったら行こう」

「何か複雑な気持ちね・・・」

どうやら不服そうなルイズ。やっぱり魔法のところを気にしてるのか？

仕方ない、今度特訓でもしてあげようかな・・・

授業中にあるじ（偽）が指名されたところで、ルイズ（偽）にやらせたいと言い、ルイズ（偽）が杖を取り出す

「ん、準備OKだ。カウントダウンを始めるぞ」

「分かったわ」

「分かっているわよ」

「了解」と

もう分かるだろうが、上からあるじ、ルイズ、才人の順番だ。

「行くぞ、3・・・2・・・1・・・」

ードオオオオオン

教室でルイズ（偽）が杖を振った瞬間に爆発が起こる。

「あら、ちよつと失敗したみたい」

やっぱこのセリフは言わなきゃ

「何言わせてるのよ」

ルイズは気に入らなかったみたいだ。痛てえ・・・

「あのーつばめさん？」

ん？どうかしたのか

「あるじ？どうかしました？」

「教室は平気なのですか？」

ああ、その事か

「大丈夫ですよ。ルイズ（偽）に使わせた魔法は、爆発音と煙を出す魔法ですから。まあ、見た感じは爆発している様に見える筈ですよ」

「そ、そうなんですか・・・」

## 第？話（後書き）

次の投稿はいつになるか未定です

どうやったらあんなに更新を早くできるのか……

他の作者様達を尊敬してしまいますね

はあ、こんな小説を読んでくださっている方々に感謝を申し上げます。いや、割と本気で

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2880q/>

---

双月と猫

2011年8月29日21時05分発行